

建築学生ワークショップ 仁和寺 2023

architectural workshop NINNAJI

参加学生募集！

応募締切

5.19

Call for entry

門跡寺院（御室御所）― 京都・仁和寺

古都京都の文化財としてユネスコの「世界遺産」に登録されている聖地に於いて

仁和寺について

888年に建立された寺院・仁和寺は、皇室出身者が住職となる門跡寺院として幕末まで最高の格式を保たれ、国内でもまれにみる皇室とゆかりの深い寺院です。仁和寺は創建～鎌倉期に隆盛を極めますが、1647年に始まった応仁・文明の乱で、本尊を安置する金堂を始め境内（伽藍）の建物のほとんどを兵火で焼失するという悲運に見舞われます。この応仁・文明の乱から約160年後の1634年に伽藍再興の機会が訪れます。さらに当時、御所の建て替え計画もあり、1613年に建立された御所の正殿・紫宸殿や台所門などが仁和寺に下賜される事になりました。現在の金堂はこの紫宸殿の遺構であり、近世寝殿造として最古の建造物であることから国宝に指定されています。さらに二王門や五重塔などの建造物も建立され、1646年に仁和寺は往事の姿に戻りました。現在、二王門など建造物十五棟（国宝一棟、重要文化財十四棟）が国の重要文化財として指定を受けています。

開催

本開催は、公募した参加学生たちを5月19日に選定し、10の班に分かれて、6月10日（土）に全国から京都に集まり、現地調査を開始します。境内では、開催テーマとしての位置づけにもあるこの場所が持つ特有の力や意味を身体で感じ、その中から各々の班で発想の原点を見出していきます。さらに周辺地域の街歩きを繰り返し、いま現代に生き、地方で学んでいることへの意味をみずから問うていきます。

7月15日（土）の提案作品講評会では、国内外にて活躍をされる建築家の先生方を中心とした講評者の指導のもと、日本における貴重で特殊な環境における場所性に根づいた実作品をつくりあげる意味を問い正され、翌日、7月16日（日）の実施制作の打合せでは、地元の建築士や施工者、大工や技師、職人の方々に伝統的な工法を伝えていただく機会を得ながら、日本を代表する組織設計事務所の方々や多くのゼネコンに所属される技術者の皆様による実技指導をいただきます。

9月3日（日）、この参加学生たちが制作した小さな建築を10体、仁和寺境内に実現します。当日は、これらのプロセスを経て創出した建築空間を1日だけ、どなたでも体験していただけます。そして、建築・美術両分野を代表する評論家をはじめ、第一線で活躍をされている建築家や美術家の方々、世界の建築構造研究を担い教鞭を執られているストラクチャー・エンジニアによる講評者にお集まりいただき、公開プレゼンテーションを開催いたします。

学び

開催には、府内をはじめとした京都周辺の多くの方たちや、これまでの開催地の関係者の皆さま、そして全国から集まる建築に関わる関係者や一般参加者に向けた発表を行います。建築のプロセスに胸を躍らせる3ヶ月。参加学生たちがさまざまな歴史をもつ古都の伝統を学び、この文化に位置づけた解釈を生み、仁和寺に存在し続ける建築様式に連なり、訪れた人たちの心を落ち着かせ、祈りを捧げるような空間体験と提案の発表に、どうぞご期待ください。

「弘法大師（空海）生誕1250年」

2023年仁和寺 開催



金堂



二王門



宸殿北庭



宸殿南庭



御室桜（観音堂と五重塔）



鐘楼



御影堂

Architectural Workshop NINNAJI 2023

開催場所 仁和寺境内（京都府）

888年に建立された寺院・仁和寺は、皇室出身者が住職となる門跡寺院として幕末まで最高の格式を保たれ、国内でもまれにみる皇室とゆかりの深い寺院です。



現地滞在スケジュール

6月10日(土)
現地説明会・調査(日帰り)

7月15日(土)
提案作品講評会(1泊2日)

16日(日)
実施制作打ち合わせ(1泊2日)

9月12日(火) - 18日(月)
合宿にて原寸制作(6泊7日)

9月17日(日)
公開プレゼンテーション

※参加申込の際に、全日程の予定を確認してからお申込みください。

7月01日(土) 午後
各班エスキース(東京・大阪会場)

開催期間

2023年9月12日(火) - 18日(月) 6泊7日

※合宿にて原寸制作

※9月17日(日) 二王門前(北側)にて公開プレゼンテーション

参加費用

実費 (宿泊費、保険代、資料費等 ¥35,000 事前徴収制)

※現地までの交通費・食費は各自別途負担となります。

※開催地の有志の方々のご協力と、学生の参加費により運営をしています。

参加申込

ウェブサイトからお申込みください

<https://ws.aaf.ac>

※参加者募集期間

2022年9月28日(水) ~ 2023年5月19日(金) 23:59(必着)

※参加対象者

建築および都市、環境、デザイン、芸術など、これに類する分野を学ぶ学生および院生
【参加学生】定員：60名程度(大学院生8名+参加学部生42名+運営サポーター10名)
10グループを予定

ただし、定員を超えた場合は、主催者による選考をおこないます。予めご了承ください。

【運営サポーター】定員：5~10名程度(参加・宿泊費無料 開催期間中)

開催期間中、合宿期間中の運営サポーターも募集いたします。(学部は問いません)

※交通費・食費

各自・自己負担

参加予定講師者

日本の文化を世界へ伝えるの方々を中心として、建築・美術両分野を代表する評論家はじめ、第一線で活躍をされている建築家や都市計画家、コミュニティデザイナー、構造研究を担い教鞭を執られているストラクチャー・エンジニアによる講評。また近畿二府四県の大学で教鞭を執られ、日本を代表されるプロフェッサー・アーキテクトの皆さまにご参加いただきます。

石川 勝 (大阪・関西万博会場運営プロデューサー)

櫻井 正幸 (旭ビルウォール 代表取締役社長)

平田 晃久 (建築家 | 京都大学 教授)

太田 伸之 (日本ファッションウィーク推進機構 実行委員長)

佐藤 淳 (構造家 | 東京大学 准教授)

平沼 孝啓 (建築家 | 平沼孝啓建築研究所 主宰)

前田 浩智 (毎日新聞社 主筆)

陶器 浩一 (構造家 | 滋賀県立大学 教授)

藤本 壮介 (建築家 | 藤本壮介建築設計事務所 主宰)

建畠 哲 (美術評論家 | 多摩美術大学 学長)

芦澤 竜一 (建築家 | 滋賀県立大学 教授)

安井 昇 (建築家 | 桜設計集団 代表)

南條 史生 (美術評論家 | 森美術館 特別顧問)

遠藤 秀平 (建築家 | 遠藤秀平建築研究所 主宰)

安原 幹 (建築家 | 東京大学大学院 准教授)

五十嵐太郎 (建築史家・建築批評家 | 東北大学 教授)

竹原 義二 (建築家 | 神戸芸術工科大学 客員教授)

横山 俊祐 (建築家 | 大阪公立大学 客員教授)

倉方 俊輔 (建築史家 | 大阪公立大学 教授)

長田 直之 (建築家 | 奈良女子大学 教授)

吉村 靖孝 (建築家 | 早稲田大学 教授)

腰原 幹雄 (構造家 | 東京大学 教授)

建築学生ワークショップとは

建築ワークショップは、建築や環境デザイン等の分野を専攻する大学生を対象にした、普段の大学生活では体験できないスケールで作品制作を行う地域滞在型のワークショップです。国内外にて活躍中の建築家を中心とした講師陣の指導のもと、開催地の歴史や地域環境を研究しながら、他大学生との交流の中でその場所における社会的な実作品をつくりあげる経験を目的としています。

“今、建築の、原初の聖地から”伝えたいことを、空間として表現してください。

2023年、世界から注目されている古都・京都の基点となる、皇室とゆかりの深い寺「御室御所」(おむろごしよ)と称された境内にて、小さな建築空間を実現する建築学生ワークショップを開催します。近現代における主要都市のまちづくりでは最も貴重となる伽藍をはじめとした伝統的な寺院儀礼の宝庫となる貴重な文化財を多く蔵し、世界各地から多くの参詣に訪れるこの地で、共に学んだ空間を発信していきます。学生たちはきっと、その若い感性によって新たな発見をし、日本のナショナルリティを未来へ継ぎ、創造を提案をしてくれることでしょう。

【スケジュール】

5月11日(木) 参加説明会開催(東京大学) 五十嵐太郎

5月16日(火) 参加説明会開催(京都大学) 平田晃久

5月19日(金) 23:59 必着 参加者募集締切(参加者決定)

6月10日(土) 現地説明会・調査

7月1日(土) 各班エスキース(東京会場・大阪会場)

7月15日(土) ~ 16日(日) 提案作品講評会と実施制作打合せ

15日(土) 提案作品講評会

16日(日) 実施制作打合せ

7月17日(月) ~ 9月11日(月) 各班・提案作品の制作

9月12日(火) ~ 18日(月) 合宿にて原寸制作ファイナル

12日(火) 現地集合・資材搬入・制作段取り

17日(日) 公開プレゼンテーション

18日(月) 撤去・清掃・解散



御殿【宸殿】



茶室(飛濤亭)

【制作内容】

“今、建築の、原初の、聖地から” ~ 古都の未来のために建築ができること

“唯一無二の環境を守るために、あなたの提案を実現化してください”

- ・フォリー(原寸模型)を地域産材(自然素材:木材、和紙、土、石など)の材料で制作
- ・リユース、リサイクル制作を前提とし、ゴミを出さない手法や構法、利用方法を探る

Architectural Workshop NINNAJI 2023

開催記念 説明会 講演会

全国の建築学生が合宿にて制作を行う「建築学生ワークショップ」は2023年、9/12(火) - 18(月)に仁和寺境内にて開催します。このワークショップの参加募集の説明会と開催を記念して、活躍される建築家に自身の学生時代の体験を通して、現在の研究や取り組みにどう影響しているのかをレクチャーしていただきます。ワークショップへの参加を予定していない方でも、どうぞお気軽にご参加ください。

東京会場

東京大学 (弥生キャンパス) 農学部 弥生講堂アネックス

東京メトロ南北線「東大前駅」徒歩3分

東京メトロ丸の内線・大江戸線「本郷三丁目駅」徒歩10分

5月11日|木|18:30 - 20:00 (18:00 開場)

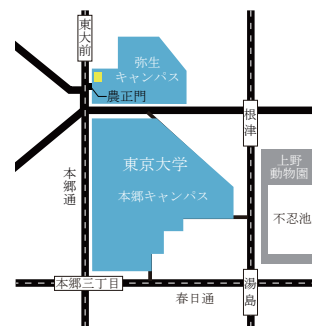
入場無料 | 定員：先着 100 名 | 要申込

※ 当日のご参加も若干名様まで可能です。
※ 開催日程・場所は予告なく変更する可能性があります。
※ ウェブサイトを再度ご確認ください。



基調講演 **五十嵐太郎** (建築史・批評家)

1967 年生まれ。1992 年、東京大学大学院修士課程修了。博士 (工学)。現在、東北大学大学院教授。あいちトリエンナーレ 2013 芸術監督、第 11 回ヴェネチア・ビエンナーレ建築展日本館コミッション、「窓展—窓から見える世界—」「インボッシブル・アーキテクチャー」の監修を務める。第 64 回芸術選奨文部科学大臣新人賞、2018 年日本建築学会教育賞 (教育貢献) を受賞。『ル・コルビュジエがめざしたもの—近代建築の理論と展開—』(青土社)、『モダニズム崩壊後の建築—1968 年以降の転回と思想—』(青土社) ほか著書多数。



京都会場

京都大学 (吉田キャンパス) 百周年時計台記念館 国際交流ホールIII

京阪本線「出町柳駅」徒歩10分

京都市営バス「京大正門前」または「百万遍」下車 徒歩10分

5月16日|火|18:30 - 20:00 (18:00 開場)

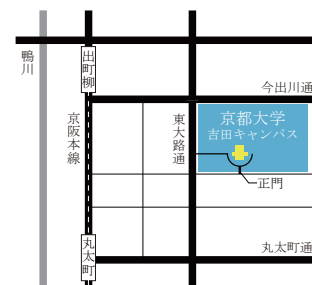
入場無料 | 定員：先着 100 名 | 要申込

※ 当日のご参加も若干名様まで可能です。
※ 開催日程・場所は予告なく変更する可能性があります。
※ ウェブサイトを再度ご確認ください。



基調講演 **平田晃久** (建築家)

1971 年大阪生まれ。97-05 年伊東豊雄建築設計事務所勤務。05 年平田晃久建築設計事務所設立。現在、京都大学教授。第 13 回ベネチア・ビエンナーレ金獅子賞 (日本館) など多数を受賞。また、パウハウス (ドイツ)、ハーバード大学 (アメリカ合衆国)、Architecture Foundation (イギリス) 等で講演。そのほか、東京、ロンドン、ベルギーなどで個展、MoMA にて "Japanese Constellation" 展 (2016) を合同で開催。ミラノサローネ、アートバーゼル等にも多数出展している。



2010 奈良・平城宮跡



2011 滋賀・竹生島



2015 和歌山・高野山



2016 奈良・明日香村



2017 滋賀・比叡山



2018 三重・伊勢神宮



2019 島根・出雲大社



2020 奈良・東大寺



2021 東京・明治神宮



2022 広島・厳島神社

座 談 会 | ” 弘法大師（空海）生誕 1 2 5 0 年 ”

建 築 学 生 ワークショップ 仁和寺 2 0 2 3

瀬川大秀（仁和寺門跡）× 吉田正裕（仁和寺執行長）× 金崎義真（仁和寺財務部管財課・拝観課 課長）

× 腰原幹雄（構造家 | 東京大学生産技術研究所 教授）× 櫻井正幸（エンジニア | 旭ビルウォール 代表取締役 社長）

× 佐藤淳（構造家 | 東京大学 准教授）× 平沼孝啓（建築家 | 平沼孝啓建築研究所 主宰）



座談会の様子（仁和寺 高松宮記念書院にて）

——— 全国の大学生が参加するこの建築学生ワークショップは、毎年、場所を移しながら開催してきました。歴史と場所の特性をはっきりと持つ開催地と、周辺の生活文化を合わせて調査することにより、観光として訪れるだけでは知ることができない街や地域との関わり、建築を保全していく造り方の技にも触れ、制作を含めた実学としての地域滞在を叶えます。神聖な場所の静肅な空間からコンテクストを見出し、現場で建築の解き方を探るきっかけを経験していきます。

仁和寺の歴史は、仁和 2 年（886 年）第 58 代光孝天皇によって「西山御願寺」と称する一寺の建立を発願されたことに始まります。しかし翌年、光孝天皇は志半ばにして崩御されたため、第 59 代宇多天皇が先帝の遺志を継がれ、仁和 4 年（888 年）に完成。寺号も元号から仁和寺となりました。慶応 3 年（1867 年）、第 30 世 純仁法親王が還俗したことにより皇室出身者が住職となる宮門跡の歴史を終えます。また、明治 20 年（1887 年）には御殿群の焼失がありましたが、大正時代になると再建。昭和時代に入ると、仁和寺は真言宗御室派の総本山となり、近年では平成 6 年（1994 年）に古都京都の文化財としてユネスコの「世界遺産」に登録され新たな歴史を刻んでいます。境内には五重塔や二王門など江戸時代に建立された建造物が並びます。同時期に植えられたとされる御室桜は 4 月中旬に見頃を迎えますが建物と同様、当時と同じ姿を現代に伝えています。

本日は開催地として多大なご尽力をくださいます仁和寺にて、全国の参加学生にむけて導きをくださる、瀬川門跡様をはじめ、吉田執行長にもご参加をいただき、この建築ワークショップを初年度から見守り続けてくださる、東京大学の腰原先生、佐藤先生、そして毎年、私たちと併走したサポートをくださいます、旭ビルウォールの櫻井社長と、オーガナイザーの役割を担い続けてくださいます、建築家の平沼先生にお話しをお聞きしながら、弘法大師（空海）生誕 1250 年に合わせた仁和寺開催について伺いたいと思います。皆さま本日はどうぞよろしくお願いいたします。

平沼：仁和寺の伽藍や歴史の特徴的なお話をお聞かせいただけますか。

瀬川：境内の南東には現在御室会館という宿泊施設がありますが、平安時代には八角円堂という、名前の通り、八角形の形をしたお堂が建立されていたのです。このお堂は仁和寺の第一世である宇多法皇がご自身の祈りの場、念誦堂として仁和寺とは別に建立したものです。宇多天皇は父帝である光孝天皇の供養をするために仁和寺をお建てになりましたが、その後天皇は醍醐天皇に譲位されて、ご自身は出家されたのです。今で言うと政治も全てされていた方が、出家をした訳です。そして東寺の益信という、弘法大師（空海）のお弟子さんから灌頂を受けます。灌頂とは僧侶となる儀式ですが、その灌頂を授かり、仁和寺の第一世となられるのです。天皇が出家をされ、住職となられた寺院、というのが仁和寺の一番の特徴です。これが後に筆頭門跡寺院と呼ばれる所以ともなるのです。

腰原：建物はどうやって長く用いられてきたかということに着目することも一つのテーマなのですが、仁和寺では御所の建物が移築されていますね。なぜ御所から移築されてきたのか、また移築されてきた後どのように維持されてきたのでしょうか。

吉田：仁和寺は応仁元年（1467 年）から始まる応仁の乱では西軍の駐屯地だったのですが、応仁 2 年（1468 年）9 月 4 日に東軍に攻められ、その時にお堂が全て焼失しました。その時、二王門の南の双ヶ丘という丘の麓にある真光院という寺院に皆を避難させて仏様とお経と書類を守り、そこに仮御所を設けて、170 年近く 4 代の御門跡様が早く復興したいと願われました。そして江戸時代に入り、1640 年代、時代は徳川 3 代将軍家光の時ですが、家光が二条城を修復され江戸から京都に来られる際、第二十一世門跡、覚深法親王様が仁和寺の再建をお願いに行きました。当時のお金で 24 万両、今で言うと 1 両が約 12 万ですから約 312 億円かけて今の建物が全部完成しました。その時、御所の方

でも紫宸殿を始め大きい建物を建て替えるため、筆頭の門跡寺院なので仁和寺さんに紫宸殿を移しましょうと本堂として使わせていただいているんです。宇多天皇がお住まいになって、御室御所という名前がつき、それから 30 代に亘って天皇家の方々が門跡をされておりますので、御所という建物を仁和寺の方へ移して守っていくというのの一つの使命として考えたのではないかと思います。

佐藤：当時は、京都のどこにお寺や神社があって、どういう意図で西山につくりたいと光孝天皇が仰ったのでしょうか？例えば立地的に御所に対して西の方にはあまりなかったとか。また維持していくために傷みやすい箇所や、木造の建物のどこが腐りやすいとか、何か対策をされていたり、専門の職人さんがおられたりということはあるですか？

吉田：そうですね。西の方にはほとんど建物もなかったんだと思うんですね。昔は小松野と言われて、松がたくさんあった場所に建てられたと言われています。西山の方からは京都市内が一望できますので、見渡せる場所として選ばれたのではないかと思いますね。

瀬川：境内は北に金堂、南に二王門を構えており、北から南にかけて緩やかな傾斜地である地形を利用して盛り土ではなくて、地盤を削って境内を造成した形跡が見られます。また、堅牢な地盤であることから、今日まで、地震にも耐え、安定的に建物が存在していることを鑑みれば、堅牢な地盤であることが推定されます。この度、370 年ぶりの観音堂修理では、地盤面の確認も行いましたが、良い地盤に建立していることが報告されております。その当時知っていたのかどうか・・・。

佐藤：地盤が良いところを昔はどうやって感じられたのでしょうかね。

瀬川：それは、現在が過去によって形成されていることを考えれば、今後の科学的な調査や、歴史的調査が進むことによって、謎が解けるといいたいでしょうか、地盤を削っている関係か否か不明ですが、湧き水にも恵まれ、境内には多くの井戸が点在しています。衛星管理や庭園の構成に不可欠な水の重要性を意識していたのではないのでしょうか？

佐藤：水は湧いて出るけれどもはけやすいという状況と、おそらく通気性にかなり配慮した建物のつくり方をされて何百年も維持できるようにされているんだと思います。

瀬川：私共の用語で井戸のことを閼伽井戸と申しまして、仏事などで用いる折に汲む水なんです。境内は傾斜地の地面を削って盛り土をして造成しているんです。現在の御殿庭園の建物床下を見ると、庭



瀬川大秀
(仁和寺門跡)



吉田正裕
(仁和寺執行長)

平沼孝啓
(建築家 | 平沼孝啓建築研究所主宰)

園構成の関係から池や水路が設置されている辺りは比較的湿度が高いところもございます。床下なども高くなっておりますが、部分的に腐食が進んでいるところも見て取れます。

佐藤：水路がはっきりしているということですね。建物のここが特に痛みやすいということはないですか？そちらが地形的にも低い方ですか？

瀬川：高低差は、国宝金堂と二王門では 10m くらいあります。水は高いところから低いところに流れますので、境内の南に面する建物で庭園の構成要素に含まれる建物が湿気などの影響を受けやすく、傷みは顕著です。

腰原：修理には決まった大工さんがいらっしゃるんですか？

瀬川：江戸時代の仁和寺復興に携わった時の大工さんは、江戸幕府の大学頭であった中井家です。平成の観音堂大修理では、京都府文化財保護課が抱える宮大工をお願いしています。観音堂を 370 年ぶりに修理計画で重視された一つに、地盤の歪みを補正する課題がありましたので、東京駅の再開発と同じ工法である【あげまい】という構法によって地盤調整を行うことになりました。

櫻井：私は実は京都の北区で生まれ、10 歳くらいまで京都で育ちました。50 年ぶりに見るものというのは全て新鮮です。世界遺産に登録されていると外国の方がたくさんいらっしゃいますが、防犯、防災、災害でお困りのことはありませんか。

瀬川：仁和寺も近年では平成 5 年（1993 年）に御影堂や金堂など三棟が放火にあいました。その時にはやはり防災と火災報知器が作動し小火で済みましたが、やはりきちんとしておかないといけないと感じました。実は今ちょうど防災設備の工事をやっているところなんです。境内には消火設備や自動火災報知設備があるのですが、令和 2 年度（2020 年）より二か年計画で再整備を行っております。金堂、御影堂、霊明殿の三か所が同時に発火した際、自動火災報知器がついていたので初期の段階で火災を感知し、躯体に広がる前に消火することが叶ったため、部分取り替えて済みしました。過去にはテロの対象となっている寺院ですので、消火設備や訓練の充実を図ると共に、消防行政からご指導いただいている寺院でもあります。

佐藤：昔は火災や自然災害に対してどういった対応をしていたのでしょうか？

瀬川：昔は火事が起こると建物を壊していくと伺っております。火事に関する記述は資料としては確認されておりませんが、台風など風が強い時は開けた方が良いという言い伝えもあります。

平沼：なるほど。応仁の乱の全焼から再建されて、二王門や五重塔を建立された後の落雷による焼失、または逆に建造物の数が江戸時代から増えたものなどはあるのですか？

瀬川：落雷は最近も多いですね。

吉田：お堂は変わっていませんけど、霊宝館や会館とか新しい建物は増えてきています。

佐藤：私は京都の洛西高校出身なんですけれど、京都だと煤けた柱をふく職人さんがおられますね。先ほどもお庭で苔か何かを摘み取っていた様子を見たんですが、それが特徴的だったんです。材料を考えたり、形を考えたり、そういう職人さんがおられるならこんな表面の仕上げができるのではないかなど、ごく些細なことでも何かあると学生たちがつくるものを考える時の良いきっかけになると思うのですが。

瀬川：我々の感覚は新しいものにすればいいという、柱でも部分的に傷んでいるから、もし半分腐食していても新しいものにという感覚であつたので、やはり古いものを活かしていくことはすごいことですね。腐食しているところを埋めて活かしていくという、補助的に新しい木を使っていくという発想が正しいということが一番勉強になりました。腐蝕させ、色をうまく仕上げて分からないようにしていくという技術など、古いものと新しいものとの調和と言うんでしょうか。

腰原：古い柱に新しい材を補修する時に古い色に塗るか、新しく足したから時代を刻むために塗らない方が良いのではないかとということで最近議論が分かれるんです。文化論的な価値観で、せっかく本当に時間を積み上げてきた木と後から最近つけたものをわざわざそれに合うように色を塗るのは良いのかという議論です。過去から引き継いでいるものと新しく加えたものについてはどういう感覚をお持ちなんでしょうか？

吉田：私は古色仕上げをした方が目立たなくて仕上がりが良いのでそちらの方が好きです。でも観音堂はそのままでしたよね。

金崎：この度の観音堂修理では、古色仕上げになっております。

腰原：外側は1年くらい我慢すると大体馴染んでくるのですが、内部



腰原幹雄
(構造家 | 東京大学生産技術研究所教授)

佐藤淳
(構造家 | 東京大学准教授)

だと目立ちます。そういうのを継ぎはぎと思うか、文化と思うか、技術と思うかというところなんですよ。

平沼：境内の中では大工小屋みたいところに技官の方がいらっしゃるんですか？

金崎：観音堂修理の折には、工事期間中に駐在所を設けて常駐いただきました。

佐藤：植物の手入れはどうしているんですか？

金崎：庭師さんに年間を通じて見ていただいています。

腰原：御室桜などもありますし、生け花の御室流もあるわけですけど、植物と建築と宗教というのは何か特別な捉え方があるんでしょうか？

瀬川：御室流華道の理念は、宇多法皇のお気持ちを表現するための一つ的手段であり、布教でもあり、お花を通じて仁和寺に伝わる教えを感じていただくことです。そして、西山の麓に自然を生かす形で、宇多天皇は仁和寺諸堂を建立し、また、境内の一角である八角円堂に於いては、天皇家と人々の幸せを祈る場所として建立したと解釈しております。

腰原：自然の樹木と建物の関係を捉えた時に、ここからの景色を大事にしているようなところはあるんでしょうか？

吉田：仁和寺の一番の特徴は二王門を入れて金堂までの直線が300mくらいある参道だと思いますね。下から見てもすごいし、上から見ると全部が見渡せる。御室桜をバックに五重塔と観音堂が見えますし、御殿の中ですと第百十九代光格天皇のお好みの茶室飛瀟亭を庭の借景に入れても素晴らしいです。

佐藤：仁和寺には創建当時から継承されている歴史や文化などはあるのですか？

瀬川：過去に遡ると、仁和寺の境内は2キロ四方に境内地を所有し、鎌倉前期には70の寺院が点在していたと記録されております。平城京から平安京、現在で言うところの奈良から京都へ都が移り、大陸的な文化からわが国の文化、国風文化が、宗教においても新しい波、新しい仏様のお姿を生み出しました。仁和寺の創建当時の本尊である阿弥陀如来は、国風文化を示す仏様として大変すば



金崎義真
(仁和寺財務部管財課・拝観課課長)



櫻井正幸
(旭ビルウォール 代表取締役社長)

らしいといわれているのです。仁和寺は広大な敷地と寺院を有し、日本の文化の基礎を築いた場所だと捉えております。天皇様が出家し、入寺した関係から、皇族の方が歴代住職を務め、多くの文化人や芸術家が集まったことから、ここがサロン化し仁和寺を中心とする文化芸術が花開いた場所でもあると考えています。例えば、仁清といった御室焼や、狩野派の絵師なども仁和寺を訪れております。

吉田：宇多天皇様が10年間天皇を勤められた時に後押ししたのが菅原道真なんです。その時に遣唐使の派遣を中止しました。当時は中国が乱れていたので行っても十分な成果がないと、国風文化を高められた。そこで建物も純和風の建物をつくっていったと言われてます。だから仁和寺が再建された時も、昔の国風文化の建物の形で、一層から五層の屋根の幅がほとんど変わらない大変美しい五重塔を再建されています。二王門は京都の三大門（南禅寺・仁和寺・知恩院）の一つで、知恩院さんと南禅寺さんは禅宗様式で二層に仏様を祀り、両方から階段で上がれるようになっていますが、仁和寺の二王門は一層に金剛力士像がいて二階に上がりませんが、本当に美しい。全ての建物が国風文化の純和風の建物になっているのが特徴ですね。

瀬川：建築もシンプルで、国宝金堂の屋根形状は調和がとれていて感じており、究極の美、線の美しさを追求されたものと考えております。仁和寺の雰囲気全部含まれるような感覚にさいなまれます。

平沼：天皇陛下が出家をされて、筆頭門跡寺院、いわゆる仁和寺御所としての存在があるゆえに、地域の一般の生活者との関わりがあまりなかったのかなと見受けられるんですが、住まわれている周辺の方達との関わりはこれまで多くあったんですか？

金崎：仁和寺が再興されてからですが、皆さんに来ていただこうと桜を植えたり、四国の八十八ヶ所霊場を模したお堂を建立しているようです。

吉田：今から196年前、第二十九世であった済仁法親王さんが寺侍の久富家さんに四国へ行って砂を集めさせて、仁和寺の裏山、成就山に88の御堂を建て、そこにお砂を納め御室八十八ヶ所というのをつくらせたんですね。昔は御四国に行くというのは命懸けで、白装束を着てお参りをされていたんです。そこで京都の人にも身近にお参りをしていただきたいと、裏山に写しの八十八ヶ所霊場をつくられた。今は台風でだいぶ荒れたため、6年計画で整備事業をしています。最近は皆さんに親しんでいただこうとライトアップをして公開し、地



高松宮記念書院
(座談会会場)

域の自治会単位で来ていただいたりして少し近くなったね、と（笑）。腰原：花道や境内など、自然と建物が宗教としても大事にされていると思います。学生にはやはりここに欲しいもの、あるいはここに相応しいものがあるのかを考えてもらいたいと思っています。自然の中で手に入る材料や、このお寺にまつわる素材で何か思いつくようなものはありませんか？ここから出てきたものでつくって、自然に戻すということが1つのテーマでもあるんです。

吉田：ここは小松野と言われた松がたくさんあった場所ですので、まず松がありますし、今は桜を植えましたから桜が関わってくるのではないかなと思います。先ほど言いました御室八十八ヶ所の山に、台風で倒れた木がまだたくさん残っていて持ち出していないんです。

佐藤：使わせていただけるなら学生たちに取りに行かせます。

一同：笑

平沼：仁和寺としてはどんな提案を求められますか？

吉田：先ほど御門跡様も言われていましたが、第一世宇多法皇のお寺への思いが祈りであること。また、御所の紫宸殿を移築し、仁和寺の金堂となった。御所といえるべき建物をテーマにできると思います。佐藤：場所ごとのそこに込められた思いみたいなものを学生たちが伺った時にお話いただけると、学生たちの発想を膨らませる良いきっかけになると思います。

櫻井：京都は、多くの無形、有形文化財を有しており、日本文化の中心ともいえます。京都開催に於いて、世界遺産に登録されている仁和寺で最初に開催できるのは光栄な事である思っております。仁和寺で開催する意味を、宗教的、歴史的な側面からとらえ、本ワークショップのテーマ設定が叶えば幸いかと考えます。

瀬川：仁和寺の金堂は真北に建っており、金堂の上空に北極星が見えますので、金堂に向けてカメラの露出を明けて撮影を置くと開けておくと北斗七星が円になります。五重塔は胎蔵界五仏といって、東の位置にする仏様を安置しています。そして観音堂が西の方に立っている。だから仁和寺の伽藍は宇宙を表しているのではないかという話が出たこともあるんです。そういう説も含まれている建て方なんです。

佐藤：成就山御室八十八ヶ所霊場を巡るのはかなり時間がかかりますか？

瀬川：歩いて2時間弱くらいです。

平沼：学生たちが最初のフィールドワークをさせていただきに是非そういう機会をいただければと思っています。

(令和3年4月16日 仁和寺 高松宮記念書院にて)

——— 大変貴重なお話をいただき、本日はどうもありがとうございました。将来、この場所で開催した意義に継いでいくような提案作品を募りたいと思います。

聞き手：宮本勇哉（AAF | 建築学生ワークショップ2023運営責任者）